

寒暖の差激しい今春

25年産 稲作りスタート!

生産者通信

NPO法人 米ニケーションセンター 定価 100円(送料込)

三寒四温ということばがあります。今年の春は、三寒はあつても四温がありません。平地での雪消えは早かったのですが、晴天の日が三日と続かず寒暖の差が激しいようです。高気圧の勢力が何とも弱すぎるようです。晴天が続いて田がしつかり乾いたら耕耘を始めようとしていました。がいつまで待っても田は乾かず、やむを得ず19日から耕耘を始めました。案の定、トラクターの車輪が田の土にめりこみ、粘土質の強い土はロータリーで反練状態になってしまいました。耕耘後に土が乾燥してくれることを期待しましたが、それも無理のようです。それでも、雪の下で硬くしまった土に新し

い空気と温もりを供給して、土を目覚めさせたいと願いながら作業を続けています。

一方、他の田には水が張られしまつているためか、野鳥たちが集まつてトラクターの前になつたり後ろになつたりしながら、餌をついばんでいました。ゴイサギが2羽、カラスも2羽、スズメは3羽ヒバリとセグロセキレイがそれぞれ1羽です。昼上がりにはキジが夫婦で連れ立って道路を横断しているところにも出会いました。

20日にはJA柏崎が取り組んでいる「早期越路早生」の田植が始まりました。最盛期は25日頃だったようです。植え付け時期がいささか早いために、植え付け後の生育はその年の天候に大きく左右され、最終的にはその年の収量と品質にも大きく影響してしまいます。一般的な田植えは、

こしいぶきやわたぼうし等の早生種が5月7日頃から、コシヒカリは10日頃からはなります。苗を委託している農家が多く、JAからの苗の供給日が田植えの日程を既定してしまふのです。私が耕耘を始めたころには周りの農家の皆さんは荒代を終つて、25日頃には仕上げ代を始めていました。田植えまでには半月もありますから、かなり早めの作業と言えるでしょう。例年に比べて仕事を急いでいるのは、今年から「初期除草剤の散布は田植えの7日以前まで」になつてたことが理由だったようです。初期除草剤を散布するために、作業を1週間前倒ししたということ。初期除草剤を使つたことのない私には首をかしげざるを得ません。せいぜい2ヘクタール前後の作付け規模の皆さんです。田植えの3〜4

日前に仕上げ代をおこなえば初期除草は不要だと思ふのですが、それはできないようです。ただ、私のように入水が余り遅れてしまつては産卵のために水田近くまで寄つてきて、田に水が張られるのを待っているカエルたちに申し訳ない気がしています。

7日の強風で育苗ハウスの被覆材が飛ばされてしまいました、その後の天候も不順続きですがJAから委託している3千枚の苗をはじめ、ハウス内のものの生育は順調に進んでいるようです。ただ、15日に播種し、積み重ね出芽後に屋外に並べてしまった有機の苗は、なかなか緑化は進まず、1葉の展開も遅れています。低温が影響しているようです。こればかりは天候の回復を待つしかありません。

一方、山菜などは雪消えが早かつたせいか、昨年に比べて1週間は

早まつているようです。フキノトウにはじまつて、山アサズキ、タラの芽、コシアブラ、ウド、そしてワラビ等は自宅の周りで十分に楽しめます。しかし、この地域ではあまり食べる習慣のないモミジガサが私は大好きで、どんなに忙しくても5kmほど離れた山まで採りに行き、天ぷらやマヨネーズなどで味わいます。独特のクセがありますが、それが私を虜にしてしまつたのです。去年の春に長野県の奥裾花自然園を訪れた時に「冬眠から目覚めた熊は毒を持つ水芭蕉の実を食べて体にたまつた老廃物を排出する」と聞かされました。私たちが人間も春先に山菜の苦みや渋み等を楽しむのは、私たちの体が求めているのかもしれない。

《内山常蔵記》

